

Antony and Cleopatra における悲劇受容

第二部 運命観からみた観客の受容

中 村 六 男*

Mutsuo NAKAMURA : *Antony and Cleopatra* : Its Tragic Acceptance

Part II The Audience's Acceptance from the Point of View of Fortune

(1957年9月20日受理)

I. *Antony and Cleopatra* の主人公達 の悲劇受容については第一部で述べたので、次にこの悲劇の観客(読者を含む)の悲劇受容について述べねばならない。エリザベス朝の人々は一般に人間の歴史(生涯)を決定するものは神意と運命と其人間の性格とであると信じていた。社会および経済関係が人間の歴史決定と重大関係を持つと考えるまでにはいまだ至つて居らなかつたようである。しからばこれら三つのものがこの悲劇の登場人物の歴史決定に如何なる関係を持つているだろうか。この問題の考察にあつて運命を中心として検討し、それがこの悲劇の観客の悲劇受容にどの様な影響を及ぼしているかを論じてみたい。

II. Shakespeare の戯曲では fortune とか chance とか destiny とか云つた言葉が屢々用いられている。Bartlett の *Concordance to Shakespeare* によると、fortune という言葉が 1~10 回用いられている戯曲は 19 篇、11~20 回のは 12 篇、20~30 回のは 5 篇、31~40 回のは 1 篇となつている。この最後の 1 篇が *Antony and Cleopatra* であつて、実に 40 回用いられている。この様に頻りに用いられていることもこの悲劇の特徴の一つであつて、この悲劇が運命との関係の深いことを示すに外ならない。

当時の人々は運命をどう考えていただろうか。英語の Fortune に相当する言葉はギリシャ語では Tyche であつた。勿論 Tyche は語源的には幸運の意味を顕著に持つていた。Tyche は初めのうちは偶然の様に人間事(human affairs)の予測できない要素に対する哲学的抽象概念に過ぎなかつた。ギリシャの悲劇でも Tyche

は屢々出るが始めのうちは明瞭に神格化されている場合は比較的少く、事件の進行に影響を及ぼす点では三女神である The Fates に比較すると甚だ少なかつたと云われている。Tyche は寧ろ都市の守護者と考えられ、神々の列に加えられていなかつた。しかしやがて Tyche は Moirae (L. Parcae, E. Fates) と同様に幸不幸に拘わらず人間の運命(lot)をも意味するようになった。そして神格化され、Moirae と共に人間に総てのものを与える女神となるに至つた。また時々 Fates (=Moirae)の三女神、Clotho, Lachesis, Atropos の中の一女神、Lachesis と同一視されるような場合もあつた。ヘレニズム時代及びローマ時代になると Tyche は女神として次第に頭角を顕わしてきて、やがてラテン語の Fortūna という女神と同一視されるに至つた。

Fortūna は元来ローマではこの言葉の意味(ferre)が示す様に豊饒や増殖を齎す者という意味であつた。それでこの神は大地の産物と女の生命とを司る女神であつた。それが次第に偶然とか運とかを司る女神となり、この神の手から貧富、幸不幸、快不快が人間に授けられるのであると考えられるようになった。ローマ人達はこの人間の運命を司る女神を特に重視し、いろいろな名称で呼び、処々方々に神殿を建てるようになった。その神殿に祭られたこの女神の像には豊饒を象徴する角を手を持つものがあり、変動常なき移り気を象徴する輪(wheel)を持つものがあり、頭上に北極星を戴くものがあり、また目隠をしているものなどがあつた。

英国人達の考えていた Fortune はローマ人達の Fortūna に相当する。偶然とか幸運とか宿命とか運勢とかを表わすと同時に運命の女神(Goddess of Fate)を表わすのである。エリザベス朝の人々が一般に考えていた

* 信州大学繊維学部 英語研究室

所によると、地上の一切のものが現に存するが如くかくあらしめるのはその原因は天 (Heaven) にある。勿論全宇宙を創造し一切のものの上に君臨しているのは神であるのだから、その第一原因は神の摂理 (providence) にある。神は一切のものに変らざる秩序を保とうとするのであるから神の摂理は不動不変である。しかるに地上のものは特に人間は絶えず変化する。幸福なものは不幸になり、若きものは老い、健康なものは病気になる、高位の者は権力を失って悲惨な境遇に陥る。このように神の摂理の永遠不変性を変えて変動性 (mutability) を附与するものは何か。それは天上の星の影響力によると考えられた。其故にその介入原因 (the mediate causes) は星の作用と見做された。この様に地上の一切のものは星特に月によつて移り変わるのであるが、そのうち特に人間の移り変りの部分を惹き起す星の影響力を考えてこれを運命と名付けたのである。朝に権力を誇り我が世の春を謳歌して幸福の絶頂に居た者が、Essex 伯の如く、夕には忽ち變じてロンドン塔に幽閉されて不運のどん底に呻吟し、やがて断頭台の露と消え去るといつたことは当時の人々がしばしば目撃もし、また自らも経験させられる所であつた。その様な人間の移り変りを惹起する身近に感じた星の影響力を神格化した運命の女神 (Fortune) をば非常に移り気であると考えたのは当然である。それでこの女神は人間の運命の変化の甚だしさを象徴する輪を手に行っていると考えられた。人間の運命は絶えずこの輪の回転する如く変化すると見做されていたのである。

人間の運命に絶えず変化を与える星の力即ち運命の女神に対するエリザベス朝の人々の態度はどんなものであつたであろうか。キリスト教がいまだよく普及しなかつた古代の人々は星に対して迷信的な恐怖心を懐いていた。星は人間に対して悪意を持ち、人間の運命を悪く変えろと考えられていたからである。そのため星の影響から逃れるために占星術や魔術が行われた。このような昔からの星に対する恐怖心はやはりエリザベス朝の人々の一部分に幾分變形して残存していたようである。人間の一生が神意と運命によつて決定されるとするならば、星をも含めて万物の創造主は神であるから結局星の変化である運命の変化も神意によつて起ることになる。そうすると神意は運命によつて人間に示され、運命は神意の表現となり、人間は絶対的に運命の支配を受けることになる。換言すると神意即運命ということになり、神は人間に移り変りを与えて唯々苦しめる恐ろしき存在となる。King Lear の Gloucester の言葉、As flies to

wanton boys, are we to the gods, —/ They kill us for their sport. (Lear; IV. i. 38~39) はこの様な見方を表わしているものと解される。一切の人間の行動や盛衰や幸不幸なども総て神の責任であつて、人間は無責任となる。人間は唯々神の命令によつて現に存するが如くある機械の様な存在ということになるからである。天上の力の第一原因である神の摂理も介入原因である星の力も人間の側から見ると神と考えても運命と考えても結局同じことになる。そうした考え方も一部分の人々には確かにあつたのである。Mirror の Henry VI. 52~55 に、Thus of our heavy haps, chief causes be but twain, / Whereon the rest depend, and underput remain, / The chief the will divine, called destiny, or fate, / The other, sin, through humours holp, which God doth highly hate. とあるのは不幸の最大原因を神の意志に帰し、これを fate (当時の人々は Fortune と Fate をはつきりと区別しなかつた) と呼び、神と運命を同一視している例と云うことが出来よう。勿論他方に人間の罪が不幸を齎す原因としてこの例では認めているけれども。この様に運命と神とを同一視し、人間は運命に絶対服従をしなければならぬという態度は当時の人々のうちでは比較的に俗的な方の人々の間に多くあつたようである。

ところが人間には理性がある。これによつて人間は神の明智 (skill) を体得出来る。この神の明智を体得することによつて神意を知り、運命を自己に有利に導くことが出来るという考え方が中世時代から伝つていた。そもそも星が變つてその星のもとに生れづいた人間の運命を不幸にする原因は人間が神意にそむいて墮落 (fall) したことにある。神はその墮落を星の変化に明示して人間に警告する。明智を体得した人間は直ちにそれを見て自己を正しくして神意にそうようにし、運命が悪く変転するのを回避する。Tempest の Prospero の様な人物は理性によつて神の明智を体得した人物で、星が敵意を持つて神の意志通りに変らない時は公然と反抗し、好意を持つていた時はその変化によつてすべて有利になるように利用した人物といい得る。理性によつて神の明智を体得せしめるようにするのが教育 (education) であると同時に当時の人々は考えた。そこで人間は自己の運命に個人的責任を持つことになる。運命によつて支配され、のつびきならぬはめに陥るのは自己が教育によつて神の明智を体得するように理性を働かさなかつた個人の責任である。このことを巧にもじつたのが Julius Caesar の Cassius

の有名な言葉、Men at some time are masters of their fates; / The fault, dear Brutus, is not in our stars, / But in ourselves, that we are underlings. (I. ii. 139~141) であると解されている。この様に人間は運命の支配を受けながらも、運命の変転の原因は自己にあるのであつて、理性によつて体得した神の明智をもつて、人間を殆ど運命と対等になるまで引き上げ、運命を利用するという態度である。勿論当時 John Florio が英訳した Montaigne の *Essays* で述べられている如く「運命はその指示において人間の叡智の全法則を凌駕する。」といった人間の理性に対する懐疑を持つようになった者も一部にはあつたであろうけれども、以上述べた様な態度はエリザベス朝の有識な人々の間では最も多く運命に対して取られた態度であつて、Francis Bacon (*The Essays*, XL. Of Fortune) などもそうした人々のうちに加えてもよいだろう。

ところが人間が理性を働かして運命の支配を受けながらも殆ど対等関係に立つて利用出来るというこの態度が文芸復興期の人智を重んじ宗教の支配から人間性を解放して、人間能力の絶大性を信ずる風潮と相俟つて、更に極端な程に過度になり、運命は勿論のこと神とまで対等に人間を押し上げ、人智を神の摂理以上と考えるような態度が現われた。この様な態度を取る主人公を含む作品も発表されるに至つた。Chapman の *Conspiracy of Byron*; *The Tragedy*, Marlowe の *Tamburlaine*, Milton の *Paradise Lost* などはこれに類するものと云い得る。これらの作家達はギリシャやローマの作品の影響を受けた人達であつたが、この外にも Machiavellism を信奉する人達も現われて来た。例えば Shakespeare では Richard III や *King Lear* の Edmund などである。彼等は星の人間に及ぼす影響力即ち運命の人間支配力を全面的に否定する。それでこの種の運命に対する態度は人智を重んじ、知力の勝れた人間は運命などとは何も関係せず、機会を捉えて万事を自己に有利に処理するだけであるといった運命も神も否定する態度である。

エリザベス朝の人々の運命にたいする態度を三種に大別して説明を試みたのであるが、Shakespeare の作品には純粹に最後にあげた部類に属する人物は登場しない。運命の支配力を否定する Richard III や Edmund の如きも結局は運命に支配されて居つて、tragic irony として表現されているに過ぎない。Shakespeare にとつては人間が神や運命に勝ち誇ることは罪であり、神はどこまでも万物に君臨しているのであつて、運命は善悪は

兎も角も人間に多大な影響を与える力を持つていてと考えていたからである。

Shakespeare は人間の運命を決定するこの様な星の影響力の如き外的な力 (the exterior power) が恐怖や憐愍の情を唆るものとして悲劇的価値を認めていた。初期の代表的な悲劇 *Romeo and Juliet* ではこの外的な力に関して fortune, chance, fate, destiny 或は lot などの文学的抽象概念を表わす言葉は余り多く用いてはいないけれども、当時の人々が人間の運命の変転に直接関係するものと信じていた星をもつて運命である天上の力を表わし、この悲劇の要因を主としてそれに頼つて居る。Romeo と Juliet との二人は 'a pair of star-cross'd lovers' (Prol. 6) と呼ばれている。彼等が悲劇に終つたのは星めぐりが悪かつたからである。Romeo は Juliet の死の報を Balthasar から受けると 'Is it even so? then I defy you, stars.' (V.i.24) と云つて敢えて運命に反抗する。Friar Laurence も善意と賢明さを持つていたのであるが、遂に計画通りに事が運ばず、重大な齟齬を來たして悲劇を招來してしまう。そうしてその理由を 'A greater power than we contradict / Hath thwarted our intents; (V.iii,153) と歎いて運命のなす所と認めている。要するに Romeo と Juliet という純真無垢な二人の若者は運命の気まぐれの犠牲となつたのである。神の摂理は Montague 家のひとり息子と Capulet 家のひとり娘とを犠牲にして相争う両家の不和を取り除き、秩序を保つことにあつたにせよ、運命がこの可憐な二人を殺してしまつたのである。たとえ相敵対する両家の子供達が一目見て無謀にも互に熱愛することの愚かさを認めるとしても、Friar Laurence の計画に軽卒と疎漏さとを認めるにしても、星即ち運命という人間の外にある要因が悲劇を齎らしたのであつて、この様な悲劇を外的悲劇 (an external tragedy) と云うのであるが、この様な悲劇は先に述べた運命に対する第一の態度と密接に関連して居り、観客には容易にそうした悲劇の結末を受け容れることが出来ないのである。

Shakespeare の悲劇時代の作品になると運命と登場人物との関係は *Romeo and Juliet* の場合とは非常に異つてくる *Hamlet*, *Othello*, *Macbeth* 或は *King Lear* にしろ、悲劇は単に星といった外的な力である運命のみによつて惹起されてはいない。其等の主人公達の性格には必ず何処かに欠点がある。同時に必ず悪人が登場する。主人公達はこの性格上の欠点のため行動を誤り、それが悪人の乗ずる所となる。そのため主人公達は苦しめられ

る。この苦しみは主人公達が自らの心を苦しめる原因となり、遂には外部から与えられた苦しみよりも内なる自ら苦しめる心の苦悩の方が一層激しいものとなる。主人公達の性格はこの苦悩の裡に発展していく。最後には外部から与えられる苦しみと同時に自ら蒙らせている心の苦悩とを断ち切るものとして死が起るのである。主人公は勿論主要人物も絶えず彼等の存在と運命とを支配する自然とか或は星といった外的な運命の力などの性質を参照しているけれども、実は主人公達の運命はこの性格の欠点を起点として彼等の性格がそれを形成しかつ変転させていくのである。其故にこうした運命は彼等の性格分析の一部分をなしている。この意味でこれらの様な悲劇は内的悲劇 (internal tragedies) と名付けられる。

Hamlet I. iv. 23~28 にある様にこの欠点は 'some vicious mole of nature in them, (何か一つの生れついた汚点) であつて、氏素性、気質、習癖などの様に自然に押し着せられた欠点の場合もあり、また偶然から与えられた印の場合もある。何か一つの明白な欠点である。その欠点によつて明智を体得していても、それを活用し得なくされるのである。(もし活用し得る場合ならば運命を利用するので悲劇ではなくなつてしまう。)其故に運命に対する第二の態度を取つたエリザベス朝の識者層に属する観客はこれらの悲劇では非常に主人公達に同情心を喚起させられ、深い哀憐の情を懐き、その運命の恐ろしさに異常な恐怖心を作興されるのであるが、同時にそうした欠点のため結局悲劇は自ら招いているのであり、この様に苦しみ続けるよりは寧ろ死によつてその苦悩を断ち切つた方が主人公達にとつてよいだろうという気持ちにさせられるので、或る程度観客は悲劇を止むを得ないものとして認めることが出来たであろう。しかし主人公達のこうした止むを得ない些細な一つの欠点を持つた性格が、彼等をあの様な悲惨な結末に導くことは、充分納得のいくように自然に描き出す Shakespeare の天才に舌を巻きながらも、何か余りにも恐ろしい生命の浪費と云つた様な感じが幾分なりとも伴つて、これらの悲劇を全面的に受け容れることは観客には困難であつた様に見える。

Ⅲ. *Antony and Cleopatra* では登場人物と彼等の運命とはどの様に取扱われているだろうか。またその運命の取扱われ方が観客のこの悲劇の受容に如何なる関係を持つたろうか。

第一幕

第一場 Alexandria の Cleopatra の宮殿の一室。この場はこの悲劇のテーマを要約しているものと思われる。ローマ人達の眼からすると Antony はエジプト女王 Cleopatra に溺愛し、全く度を越えている (I. i. 1~2)。何事にも度を越すことは賢明とは云えない。理性を働かして明智を体得している者のなす所ではない。それは愚者となることであり、自己の運命を不幸に導き、世の中の秩序を乱すことになる。しかしこの度を越した溺愛こそは彼の運命を変転する起因となる性格上の欠点であると同時に、彼にとつてはこの穢らわしき世界での人生最高の貴きことを経験させるものであつた。Antony と Cleopatra というローマの偉大な政治家であり武人である男と絶世の美人であるエジプトの女王とが互に相愛の抱擁をすることは比類のないすばらしいことである。このことを世人に知らしめなければならない。その為に罰の苦痛を受けることも覚悟の上であると Antony は挑戦的に宣言する (I. i. 35~40)。そして彼はローマ帝国も、Caesar も、妻の Fulvia のことも一切俗世のこととして無視したのである (I. i. 18~35)。しかし、Cleopatra は "Antony will be himself." (I. i. 42) と予言めいたことをいう。この言葉は両刃の意味を持つと解される。ローマ的偉人としての Antony とエジプト的偉人(ローマ人の眼から見ると恋に溺れた愚者)としての Antony と、両役を演ずるのであるという意味を持つようである。実際彼は現実的なローマの世界を捨てて、エジプトの世界こそ彼の居所 (space) であると云いながら、ローマの世界を完全に捨て去ることが出来ず、両世界の間を絶えず転回するのであつた。其処に彼の行動や心に矛盾と混乱が生じて来る。というのはローマおよびエジプトの両世界は互に価値判断の基準が相反し両立することが出来ないからである。ローマ人から判断すると溺愛に酔っている Antony は "He is not Antony." (I. i. 57) であり "He comes too short of that great property / which still should go with Antony." (I. i. 58~59) であつた。自己の property を失つた者即ち degree を忘れた者に運命が好転する道理はない。そこでローマ人達は彼に明日の better deeds を期待する。しかるに彼は破滅へと導く運命を自ら招いて、しかもその罰を意識しながら自己の価値判断(絶えず変動する)による高貴なる道を追求めて行く。結局愛のために妻子も権力も戦の勝利も遂には生命をも捨てて all for love のために一切を捧げ

るといふこの劇曲のテーマをこの第一場は示している。

第二場 前場と同一場所の別室。運命と関連の多い場である。ト者と Cleopatra の侍女 Charmian, Iras および侍従 Alexas などとの間で冗談を交えながら運命判断が行われる。運命は自然の秘められた広大な本の中に読むことになつており、人間の手相にもそれを読むことが出来る (I. ii. 8~10)。Char. Good sir, give me good fortune. / Sooth, I make not, but foresee. (I. ii. 13~14) とト者は云う。ト者の予見によると Charmian は 'You shall be yet far fairer than you are'. (I. ii. 16) であり, 'You shall be more beloved than beloved. (I. i. 22) である。肉体的に現在よりも美しくなるのではなく、人間としてより美しくなり、愛されるより他を愛する人間となるだろうと云う。実際その通りに第五幕第二場 229 行で Cleopatra をして "Now noble Charmian," と呼ばしめ、また342行で Caesar をして彼女の殉死の有様を "O noble weakness" と叫ばしめたのである。女王 Cleopatra を献身的に侍女として愛することによつて肉体的な美しさよりも精神的な美しさを発揮するに至ることを予見している。I. ii. 25~40 では、Charmian は肉欲的で、自由な生活と女としての現世的な榮達とを冗談のうちにも希望しているが、ト者は彼女が女王よりも長く生き、運命は現在よりも悪くなつて行くと述べる。Charmian はト者の言葉は出鱈目だと云うが、実際にこの予見通りに彼女は女王よりほんの僅かばかり後に毒蛇に身を咬ませて女王の後を追つて死ぬのであるから予言は的中することになる。Cleopatra の侍従 Alexas は全部其処に居る者が運命を占つてもらおうと云う。すると Antony の味方であり部下である Enobarbus は現実的で理知的な人物であるので、Mine, and most of our fortunes to-night, shall be —/ drunk to bed. (I. ii. 44~45) と、今晚は酒を呑んで酔つて寝ることが吾々の大抵の者の運命だと茶化す。ト者は更に侍女 Iras の運命も Charmian と同様であると彼女の手相を見ながら云う。Iras も最後には、Cleopatra の悲壯な最後を悲しんでそのために死ぬのである。I. ii. 59~71 にある様に女王の侍女達の Charmian も Iras も人間に幸運を授けるものは Isis と考えてこの神に祈る。この女神は元来エジプトでは大地と豊饒とを司る神であつたのであるが、後になつて当時の英国では月を司る神と考えられていた。ところが月は非常に変化の甚だしい星であるので星の中では最も人間の運命に変化を与える最大な力を持つものと考えられ

ていた。其故に Charmian も Iras もエジプトの官廷の女王の侍女であるので、Shakespeare が運命の女神として Isis を持つて来たのであろうが、当時の人々は Isis はやはり Fortune に関係があると考えていたのである。この悲劇の登場人物は自己の運命に常に意識的に注意を払つている。このト者はこの悲劇では恰度 *Macbeth* の妖婆の様な役割を果していると考えられる。唯々異なる所は *Macbeth* は妖婆の予言を信じて行動して破滅に至るのであるが、この悲劇の登場人物はト者の運命の予言を其程に信じないだけである。しかしト者の言葉通りの結末となる。この悲劇では Enobarbus が Antony に対して道化 (a court fool) と chorus との役割を果すものと見ることが出来る様に、このト者は一種の chorus と prologue の役割を演じていると見ることが出来る。Antony は Cleopatra に溺愛して己の本国ローマもすべて忘れ去つていたが、Cleo. He was dispos'd to mirth; but on the sudden / A Roman thought hath struck him. (I. ii. 79~80) とある様に突然こうした溺愛の忘我の最中にローマ的な現実的な考え方が醒めた。ローマからの使者に向つて Speak to me home, mince not the general tongue;/ Name Cleopatra as she is call'd in Rome;/ Rail thou in Fulvia's phrase, and taunt my faults / With such full license, as both truth and malice / Have power to utter. O then we bring forth weeds, / When our quick minds lie still; and our ills told us / Is as our earring. (I. ii. 102~109) と、Antony は自己の耽溺生活に気付いてありのままを報告する様にと命ずる。そして、These strong Egyptian fetters I must break, / Or lose myself in dotage. (I. ii. 113~114) と独白する。また別の使者から正妻の Fulvia の訃報を受けて独白する。I must from this enchanting queen break off, / Ten thousand harms, more than the ills I know, / My idleness doth hatch, (I. ii. 125~127) と彼をエジプトから呼び戻すために Caesar と戦争を始めて遂に死んだ妻の Fulvia の事が心に思い出され、女王の魅力から脱して国事や其他万事をなござりにしたことから生じた百害を是正しようと決心する。現在の様な逸楽に耽つているとそれは運命の輪の回りに苦痛に変わることを意識する (I. ii. 121~123)。Antony はこの悲劇の始めて既に自己の運命に相当の考慮を払つていることが解る。Enobarbus の反対にも拘らず Fulvia の死後の始末のため、ローマにいる自己の盟友達のため、

また三頭政治 (triumvirate) を維持するため、即ち自己の國家やローマ人としての義務のために急遽ローマへ出發することに決意する。此處に Antony のエジプトおよびローマの両世界への彷徨が始まる。しかし運命の輪の回転の如く絶えず Antony の関心は両世界を極として変動するが、その輪の中心の様に自らの意識に上らない場合もあるが女王に対する彼の愛は常に変わらないのである。

第三場 前場と同じ場面。Antony がローマに出發する旨を Cleopatra に告げる。その理由は I. iii. 41~56にある通り、Sextus Pompeius が暴頭してきてローマの三頭政治に不満を持つ徒輩と結び、現政權を危殆に陥らしめようとしている。それで三頭政治にたずさわる主権者の一人である Antony が暫時ローマに行くことを事態が強要する。しかしながら自己の真情は総て Cleopatra に託して行く。それに本妻の Fulvia は既在世にはないのだから心配するには及ばないと告げる。出發に関して彼と女王とは互に争うが、遂に Cleopatra は、*And all the gods with you! Upon your sword/ Sit laurel victory, and smooth success/ Be strew'd before your feet!* (I. iii. 99~101) と云つて、彼のローマへの出發を承諾して祝福する。これに応じて Antony は *Our separation so abides and flies,/ That thou, residing here, goes yet with me;/ And I, hence fleeting, here remain with thee.* (I. iii. 102~104) と云う。彼は女王の魅力から完全に脱却することが出来ない。彼は自らの運命を好転するには余りに情的であり、女に寛大すぎたのである。明智はあるのではあるが、こうした性格の欠点のため、また Cleopatra の魅力が余りにも絶大であつた為に、それを自己の運命の好転のために利用出来なかつた。そのことよりこの悲劇が始まるのである。

第四場 ローマの Caesar の邸宅。三頭政治の主権者の一人 Octavius Caesar が Alexandria から Antony に関する情報を受けて他の一人の主権者の Lepidus にその様子を伝える。それによると Antony は昼は釣、夜は酒宴と欲を尽して歳月を空費し、彼も Cleopatra も身の程を忘れて男女の区別がつかない程であり、国政を聴取せず、三頭政治にたずさわる仲間の二人を忘れたかの如くであると云う。(I. iv. 4~8)。Antony は、*A man who is the abstract of all faults/ That all men follow.* (I. iv. 9~10) だと Caesar は云う。これに対して人のよい Lepidus は、*His faults, in him,*

seem as the spots of heaven,/ More fiery by night's blackness; hereditary,/ Rather than purchased; (I. iv. 12~14) と、極めて同情的で、彼の欠点は生後持つたものでなくて生得のものだから止むを得ず、夜の暗さで益々輝きを増す天上の星の様なものであり、彼が立派であればある程その欠点が目立つて来るのだと云う。Caesar は Antony の欠点が彼自身にだけ関わるのであれば許すことが出来るが、國家有事の際、三頭政治の仲間たる彼等二人にかくも彼の輕拳が迷惑を掛けている時には許すことが出来ない (I. iv. 23~25)、彼の行動は、分別が有りながら、その経験によつて得た教訓を捨てて目先の逸樂に耽溺し、人間を國家に例えれば (the state of man) その君主たる判断に反逆している男の子供の行動の如きであるのだから、大いに叱責すべきであると云う (I. iv. 28~33)。其處へ使者が来て Pompey が勢力を増強し、ローマの不平党と相呼応し、更に Menecrates と Menas の二人の海賊が参加して制海權を握り、イタリヤに侵入したと伝える。Caesar は早く Antony が自己の行動の恥辱であることに醒めてエジプトより帰つて来ることを切望する。

第五場 Alexandria の Cleopatra の宮殿。Cleopatra の Antony に対する愛欲の情をいかんともなし難き情景を巧みに描いている。

第二幕

第一場 Messina の Pompey の邸宅。Pompey, Menecrates, Menas の三人の会話で始まる。Pompey は神々は最も正しい人の行動を助けると云う。しかし自己への神の援助のおそいのを不満に思う。Menecrates は吾々は身の程を弁えないために全知なる神々が吾々の為になるようにと拒んでいる害悪を神々に願うことがある。其故に吾々の神々への祈りが聴き容れられない方が却つて吾々の利益になることもあると云う。しかし Pompey は彼の勢力が今や crescent な月の如くでやがて満ちるであろうと云う (II. i. 1~11)。彼等の神々とは結局は運命の神である。人間の運命は常に變化する。彼の勢力は欠けたる月が満月になる如く満ちるだろうと Pompey は希望的に予言する。しかし欠けたる月は更に虧けてやがて消えてしまうことがある。彼は人間の運命の變転を意識しているが自己の運命は好転するとのみ考えてその逆の場合を考えない。其点いささか明智に欠ける所がある。自己の希求する所と現実の事実との区別がつかず混同している。Caesar と Lepidus が優勢な

軍勢を率いて出陣していることを事実として認めようとしてもしない。また Antony は Cleopatra の魅力に惹かれて国政を忘れ去っているのが彼と戦うためにエジプトから帰つて来ることは有り得ないと考える。しかし Antony がずつと前にエジプトを出発して今やローマに着こうとしているとの報告を友達の Varrius より受けて喫驚する。それで自己の迂闊だったことを少しく悔いるが、その直後に酒色に溺れた Antony を Cleopatra の膝元から引き離した自己の力は大了たものであると自惚れる。Caesar と Antony とは結局はおり合うものではないのだから両者は違はず争いを始めるだろうと樂觀する。しかし両者が争うか争わないかは神々の御意にまかせて、唯々最強の軍勢を用いるかどうかが自分達の生死に関わる重大問題であると云つて策略を用いようとしなない。Pompey は思慮が浅はかであつて、而も樂觀的である。其故に運命を自己に有利に好転させることが出来ない。彼は後程 Caesar, Lepidus, Antony の三頭政治の主権者達との会谈成立後の船中の祝宴中に、彼の海賊上りの部将 Menas が此等三巨頭を暗殺して天下を取るやうにとの進言を取上げて実行することが出来ない(II. vii.)。そのため Menas から見放され、最後には、Caesar に滅亡される運命を辿る。観客は Pompey の正義さは一応は認め、多少の同情と哀憐の情を禁じ得ないけれども、彼の如き愚かで自惚の強い性格の者が政争に従事しているのであるから、運命が彼にことさらに苛酷であつたとは感じないであろう。というのは彼は己の破滅を性格上自ら招いて居るものと考えられ、彼の悲劇的な結末を受け容れるからである。

第二場 ローマの Lepidus の邸宅。Antony, Caesar, Lepidus の三巨頭等の会谈が行われ、その会谈で三者の協定が成立する。しかし彼等三巨頭、特に Antony と Caesar とは Pompey からの脅威のため一時的に内訌を中止するものの、其が無くなれば協定を破つて互に争う運命を必然的に持つている。理性の勝れた Enobarbus はそれを予言する(II. ii. 103~106)。また理性的な Caesar も或程度それを予見する(II. ii. 111~114)。其処でこの会谈に続いてこれら両者の争いをなくし永久の親和を計るために Caesar の友であり部下である Agrippa が一案を申出す。それは Caesar の姉で未亡人になつて居る Octavia と Antony が結婚するという提案である。Antony と Caesar とを義理の兄弟とさせ両者の間に亙らざる融和を成立させようとの計らいである(II. ii. 125~137)。このような提案は一般人や浅薄な

樂觀主義者には一応名案として頷けるものであろう。其処で Antony も Caesar も即座に賛同する。しかし何事にも極めて有効な方策には非常な害悪を及ぼす反面がある。よく効く薬は時には非常な有毒性を持つので害をなす場合が屢々あるものだ。この結婚政策は却つてその結婚の破綻から両者の争いを猛烈に燃え立たせる原因となる。そのことを Shakespeare が明瞭に示そうとするためか、その直後 Enobarbus の口より此の戯曲の最も有名な箇所の一つである例の Cydnus 川での Cleopatra と Antony との初対面の場面の華麗そのものの如き詩を Agrippa や Maecenas にむかつて語らせている。其処に Antony の運命が Agrippa や其他の人物の期待に反して転回して行くことを観客に少しの不自然さも感じさせずに Shakespeare が納得させる技巧の一つを発見できよう。言語に絶する Cleopatra の魅惑性と同時に Antony の性格、Our courteous Antony, / Whom ne'er the word of "No" woman heard speak, (II. ii. 222~223), とを Shakespeare は Enobarbus に語らせ、更にまた Maecenas の如き浅慮な人物達が政策結婚の成功を喜んで、Antony もいよいよ Cleopatra を全く捨て去らなければなるまい(II. ii. 233)と云うのに対して、Cleopatra の魅力は決してそんななまやさしいものではなく、かえつてこの結婚の結果は容易ならざることになるだろうと Enobarbus の言葉によつて仄めかしている(II. ii. 234~240)。Maecenas はその言葉を聞いて、If beauty, wisdom, modesty, can settle/The heart of Antony, Octavia is / A blessed lottery to him. (II. ii. 241~243) と如何にも自己に納得をいかせようとするかの如きことを云うが、観客には、As beauty, wisdom, modesty, can't settle/The heart of Antony, Octavia is / A cursed lottery to him. と云つているが如き皮肉な感銘を与える。この場面にも観客は Antony や Cleopatra の性格が自然と彼等を悲劇へと導いて行く経路を見ることだろう。

第三場 ローマの Caesar の邸宅。Antony は国事のために今後 Octavia と別居せねばならぬことがあるが、今迄の生活とは異つて今後は生活態度を改めると Antony は新妻 Octavia に約束する。彼女が退場するや直ちに卜者が登場して Antony と二人だけで対談する。Sooth. Would I had never come from thence / Thither! Ant. If you can, your reason? Sooth. I see it in / My motion, have it not in my tongue: but yet / Hie you to Egypt again. Ant. Say to

me, /Whose fortunes shall rise higher, Caesar's or mine?/Sooth. Caesar's / Therefore, O Antony, stay not by his side: /Thy demon, that thy spirit which keeps thee, is /Noble, courageous, high, unmatched, /Where Caesar's is not. But near him, thy angel / Becomes afeard; as being o'erpower'd, therefore / Make space enough between you. *Ant.* Speak this no more. / *Sooth.* To none but thee; no more but when to thee. / If thou dost play with him at any game, / Thou art sure to lose; and of that natural luck, / He beats thee 'gainst the odds. Thy lustre thickens, / When he shines by: I say again, the spirit / Is all afraid to govern thee near him; / But be away, 'tis noble. (II. iii. 11~29)。当時は各人にはそれぞれ生れ付いた星があり、その星が各人の運命を主として司り、同時に各人を守る一種の神があると考えられていた。それが上例の thy demon, thy angel, thy spirit である。それによつてト者は Antony が Caesar の居住するローマを去つてエジプトに向わざるを得ない外的な天上の力としての彼の運命の必然的事情を表明する。これを耳にしての彼の独白に、Be it art or hap, / He hath spoken true. The very dice obey him, / And in our sports my better cunning faints / Under his chance: if we draw lots, he speeds, / His cocks do win the battle still of mine / When it is all to nought; and his quails ever / Beat mine, inhoop'd, at odds. I will to Egypt: / And though I make this marriage for my peace, / I' the east my pleasure lies. (II. iii. 31~39) と云う。外的状況がト者の運命判断と全然同一であることを述べ、Octavia を捨て、エジプトの Cleopatra の許に走ることを決意する。これは外的な運命が彼の内的な心の中にある運命と相呼応一致していることを示す。其処で彼が新妻をすてて、女王の許に走ろうとする第二の彼の彷徨を読者は納得することになる。

第四場 ローマの街路。10行よりなる短い場面で運命とは関係しない。

第五場 Alexandria の Cleopatra の宮殿。女王が Antony と Octavia が結婚したとの報告に接してヒステリーを起して使者に乱暴を働く場面で運命とは余り関係がない。

第六場 Misenum の附近。三巨頭と Pompey との軍事談判の場面である。Caesar の言葉に And what fol-

low, to try a larger fortune. (II. vi. 33~34) とあるが、a larger fortune とは a bigger risk of war の意味で、戦争の勝敗は運命の支配する所大なることを思わせる。ところが Pompey は Well, I know not / What counts harsh fortune casts upon my face, / But in my bosom shall she never come, / To make my heart her vassal. (II. vi. 53~56) と云つて、運命に肉体は兎も角も心は決して支配されないとい味かえる。しかし Pompey は極めて易々と三頭政治の主権者達と和睦をしてしまう。勿論この媾和は Pompey には、その部下の Menas の傍白にある如く (II. vi. 82~83)、不利なものであつた。Pompey が媾和成立後の宴に笑談する様子を見て、Menas は Pompey doth this day laugh away his fortune. (II. vi. 102) と云う。まさしく其通り好機を個人的な欠陥のために捕え得ず、遂に運命を好転することが出来ないのである。Menas のこの言葉に対して、Enobarbus は、If he do, sure he cannot weep back again. (II. vi. 103) と答えている。此等の言葉はこの媾和が Pompey に如何なる結果を自ら招いているかを観客によく解るように説明している。同時にまた Menas と Enobarbus との対話によつて Antony と Octavia の結婚が如何なる結果になるかが予測されている。この結婚は政策結婚であつて、Agrippa や Lepidus の希望する様に Antony と Caesar との仲を永久に結び付けるものでなく、逆に争いを起す原因となつて、Antony は Cleopatra の許に走るだろうと (II. vi. 113~130) 云わしめている。Shakespeare がこの様に繰返して屢々そのことを遠眼の士 Enobarbus に語らせているのは Antony の運命が彼の心の志向する所によつて決定されることを示し、彼の運命は自ら招いたものであつて、特に彼に苛酷であつたのではないと、彼の運命を観客に受け容れる様に説明しているものと思われる。

第七場 Misenum 沖の Pompey の galley 船上。祝宴の場である。この媾和成立祝賀の宴の最中 Menas は船の太索を切つて船を沖に出し、三巨頭を斃して Pompey に天下を取るようと秘かに進言する。ところが Pompey は、Ah, this thou shouldst have done, / And not have spoke on't! In me 'tis villainy, / In thee, 't had been good service. Thou must know, / 'Tis not my profit that does lead mine honour; / Mine honour, it. Repent that e'er thy tongue / Hath so betray'd thine act. Being done unknown, / I should have found it afterwards well done, / But must

condemn it now. Desist, and drink. (II. vii. 73~80) と天下は取りたいが、それを敢行するには余りに勇気がなくお人好しである。権力の争奪戦に彼は敗れる性格を持つている。Menas は傍白で、For this, / I'll never follow thy pall'd fortunes more. / Who seeks and will not take, when once 'tis offer'd, / Shall never find it more. (II. vii. 81~84) と云つて Pompey を見捨てるのである。Pompey はさき に述べて様に運命の与えた機会を不決断のため逃がし、Menas をも失つて Caesar に滅亡させられるに至る運命の経路を辿るのである。

第三幕

第一場 Syria の平原。Antony の部将 Ventidius がその部下の将校である Silius に適度 (moderateness) の必要を説き、何事も度を過ぎることは他人から不興を買い不幸を招くものである (III. i. 12~26)、そうしたことを弁える分別 (discretion) が大切であると云う。これは Bacon が運命論で説いている所と同じである。

第二場 ローマの Caesar の邸宅の控の間。Antony が Octavia を連れて Athens に赴くため、彼等二人と Caesar とが別れる場である。Caesar は Antony に Most noble Antony, / Let not the piece of virtue which is set / Betwixt us, as the cement of our love / To keep it builded, be the ram to batter / The fortress of it; for better might we / Have lov'd without this mean, if on both parts / This be not cherished. (III. ii. 27~33) と云う。Caesar は Octavia が両者の仲をさき、却つて争に導く原因となることを見抜き、それを懸念するが如きである。

第三場 Alexandria の Cleopatra の宮殿。Cleopatra は使者の Octavia の人物に関して偽つて女王の気に入るようにつくろつた報告を受けて気をよくする場面である。

第四場 Athens での Antony の邸宅の一室。第二幕第六場および第三幕第二場などで懸念されていた Antony と Caesar との不和が現実となつて現われて来る。Antony はいよいよ Caesar に対して戦争の準備をする。Antony は妻の Octavia に、When it appears to you where this begins, / Turn your displeasure that way, for our faults / Can never so equal, that your love / can equally move with them. (III. iv. 33~36) と怒つて云うが、実はその戦争の原因は既に Antony

の Cleopatra に惹れる心に寧ろあつたことを観客は知っているのである。Octavia は両者の仲を調停するためにローマの Caesar の許へと旅立つことになる。

第五場 前場と同一場所の別室。Antony の下僕 Eros が Caesar が協定を破つて Pompey と Lepidus とを亡ぼしてしまつたことを Enobarbus に伝える。Enobarbus は Antony と Caesar との間に戦争が起り、その戦争は 'Twill be naught, / But let it be. (III. v. 23~24) と悲惨な結果になることを察知する。

第六場 ローマの Caesar の邸宅。Caesar は Octavia が従者も余り引連れず、みずぼらしく帰つて来たことに対して Antony に非常な立腹をする。その様にして帰つて来たのは Antony の命令によるのではなく、Octavia が自ら好んでそうしたのであると彼女が云うと、Caesar は密偵の報告によつて Antony がエジプトの Cleopatra の許に走り、恣に振舞い、戦争の準備をしていることを知つたと Octavia に伝える。Octavia は心配していたように遂に悲運のどん底に陥る。Caesar は、But let determin'd things to destiny / Hold unbewail'd their ways. (III. vi. 84~85) と stoic 的なことを云つて Octavia を慰める。しかしこの言葉には彼の大政治家たる策謀が隠されているようである。

第七場 Actium 附近の Antony の陣営。Antony と Caesar との戦争が始まり、Cleopatra はこの戦に参加しようとするが、それは適当でないといふ Enobarbus は云う (III. vii. 4)。ところが女王はこの戦争は彼女に対して宣戦されたのだから自ら出陣するのは当然だと主張する (III. vii. 5~6)。Enobarbus は女王が親しく戦に臨むことの不利を説明する。ところが女王は、A charge we bear i' the war, / And as the president of my kingdom will / Appear there for a man. (III. vii. 16~18) と参加の権利を云い張る。女王の親しく参戦の真の理由は、以上だけでは不充分で、この戯曲では余り明瞭ではない。しかしそれが敗戦に導く運命となる。更にまた陸戦にすべきか、海戦にすべきかの作戦をするのであるが、Cleopatra は海戦を主張する。女王に甘い Antony は、Enobarbus や lieutenant general である Canidius の理にかなつた進言を斥けて、非常な不利を知りつつ、海戦することに決定する (III. vii. 27~53)。Antony は運命の好転を女王への溺愛のため自ら拒むことになる。戦の結果を憂いて直言をする勇壮な一戦士の言葉にも Antony は耳をかさない (III. vii. 61~66)。Canidius の言葉通り、Antony の行動は、his whole

action grows / Not in the power on't; so our leader's led, / And we are women's men. (Ⅲ. vii. 68~70) であつて、彼の真の力の存する本源から発するものでなく、溺愛のため、女達特に女王によつてリードされているのである。理性を失い己を忘れては戦争に打勝ち得る筈がない。

第八場～第十場 Actium 附近の平原。Caesar とその lieutenant general の会話は前場の Antony と Canidius や Enobarbus との会話と全く正反対である。Our fortune lies / Upon this jump. (Ⅲ. viii. 5~6) と戦争の勝敗の運命はこの一六勝負に懸つていると Caesar は真剣であつて、Antony の様に But if we fail, / We then can do't at land. (Ⅲ. vii. 52~53) といいかげんなことは云わない。第九場および第十場は Antony の戦闘指揮及び敗戦の状況である。Antony の味方である Scarus の言葉によると、The greater cantle of the world is lost / With very ignorance; we have kiss'd away / Kingdoms, and provinces. (Ⅲ. x. 6~8) である。海戦の雌雄いまだ決しない間に Cleopatra の乗った旗艦 the Antoniad は真先に戦列を離れて逃亡する (Ⅲ. x. 10~15)。女王の逃亡を見るや Antony は帆を高々と張つて雄鴨が雌鴨の後を追うが如く逃げ去る (Ⅲ. x. 18~24)。Canidius は、Our fortune on the sea is out of breath, / And sinks most lamentably. Had our general / Been what he knew himself, it had gone well: / O, he has given example for our flight, / Most grossly by his own! (Ⅲ. x. 25~29) と云う。艦隊は勿論陸上の軍勢も逃亡し、大部分の部下達は何処かへ逃げてしまう。この様に大敗北という運命を招来したのは Antony と Cleopatra 自身達である。理性の勝れた Enobarbus は Antony の運命の迎る方向を知っていたが、その理性の与える指示に従うことが出来ず、人情の絆に一応は引かれ、I'll yet follow / The wounded chance of Antony, though my reason / Sits in the wind against. (Ⅲ. x. 34~36) と云つて、Antony の後を追う。理性と人情との闘が Enobarbus の心の中に生じ、此処から彼の悲劇が始まるのである。

第十一場 Alexandria の Cleopatra の宮廷。Antony は Actium の海戦を非常に恥じて部下達に彼の許を去るよにと説き、自殺の決意を仄かす (Ⅲ. xi. 9~10)。そして敗者の勝者に対する人物貶しをして (Ⅲ. xi. 34~40) 残念がる。他人の忠告を斥け、しかも戦わずして恥ずべき逃亡をしたことを Antony は政治的生命的の喪

失とは考えず名誉の失墜と考えている (Ⅲ. xi. 49~50)。Cleopatra の後を追つて海戦を逃れた理由として、Egypt, thou knew'st too well, / My heart was to thy rudder tied by the strings, / And thou should'st tow me after. O'er my spirit / Thy full supremacy thou knew'st, and that / Thy beck might from the bidding of the gods / Command me. (Ⅲ. xi. 55~61) と説明している。彼にとつては Cleopatra への愛は戦争の勝敗以上であり、呑神の命令以上であつたのだ。この点中世の romantic chivalry の様に愛する女のために命掛けて戦つて勝利を献げるといつたのとは大いに異り、やはり Shakespeare の生きた Renaissance 的な所が表わされており、現代性に通ずる所が多分にある。Caesar に対しては Antony は Now I must* / To the young man send humble treaties, dodge / And palter in the shift of lowness, who / With half the bulk o' the world play'd as I pleas'd, / Making and marring fortunes. (Ⅲ. xi. 61~65) という対策を取るといつて、名誉を重んずる他面に今や Machiavellism 的権謀術策を用いる覚悟をきめる。Antony は戦に敗れると同時に Cleopatra の愛に完全に征服されたことを示す。You did know / How much you were my conqueror, and that / My sword, made weak by my affection, would / Obey it on all cause. (Ⅲ. xi. 65~68) と告白するが、愛のために政治的権力の闘争を捨て、第一幕第一場の彼の言葉を此処に立証したことになる。Cleopatra が彷徨する Antony をローマの世界から再びエジプトの世界に完全に引き戻したことになる。エジプトの世界に引き入れられた Antony は其処で、Fall not a tear, I say, one of them rates / All that is won and lost: give me a kiss, / Even this repays me... Love, I am full of lead: / Some wine within there, and our viands! Fortune knows, / We scorn her most, when most she offers blows. (Ⅲ. xi. 69~74) と云うが、これは Antony の誇張した言葉でなく真情を述べた言葉である。運命の支配に完全に服する戦争、政治、或は政策結婚といった現実世界、即ちローマの世界から Antony は脱出して、やはり運命の支配を受けるものではあるが、運命の支配を越えた永遠なる愛の世界からの光明に照し出されている地上的な愛の世界即ち Cleopatra の世界に没入したからである。しかし Antony と Cleopatra は彼等の愛が超地上的な愛の世界に通じていることをいまだ意識してい

ない。更に地上の愛のために苦惱し、一種の purgatory を経て、運命の支配下にある俗世から脱して純粋愛の世界に入ることが出来るのであるが、現在の所では理智的ではなく情緒的にそうした世界からの曙光を認め始めたに過ぎない。彼等の精神的な愛の Elysium への苦惱に満ちた旅路が実際に此处から始まる。彼等は運命と戦つて、理性によらず地上的な愛からこの永遠の Elysium に入ることが出来るのである。理性或は明智は運命の支配下にある俗世のみに重要性があり、限度があつて、Enobarbus の例でも解る様にこれのみでは運命の支配の彼方にある永遠の世界 Elysium には入ることが出来ないといふ shakespeare は考えていたようである。

第十二場 エジプトの Caesar の陣營に Antony は前場の所謂 *dodge and palter in the shifts of lowness* (Ⅲ. xi. 62~63) を開始する。学校教師を大使として Caesar の許に派遣し、Antony は Caesar に、*Requires to live in Egypt, which not granted, / He lessens his requests, and to thee sues / To let him breathe between the heavens and earth, / A private man in Athens.* (Ⅲ. xii. 12~15) と要求した。また Cleopatra は *Next, Cleopatra does confess thy greatness, / Submits her to thy might, and of thee craves / The circle of the Ptolemies for her heirs, / Now hazarded to the grace* (Ⅲ. xii. 16~20) と歎願した。此等の申出に対して Caesar は、*For Antony, / I have no ears to his request. The queen / Of audience nor desire shall fail, so she / From Egypt drive her all-disgraced friend, / Or take his life there. This if she perform, / She shall not sue unheard. So to them both.* (Ⅲ. xii. 19~24) と答える。Cleopatra は Caesar のこの要求を満して王位を息子達に安泰に譲り、身を安全に置くことが出来たであろうけれども、それを敢行しない。其故にこの戯曲に現われる Cleopatra は通常史の上に伝えられている様な邪悪な妖婦ではなく、Antony と Cleopatra との愛は単に肉欲的な愛であるばかりでなく、政治、権力、名譽、或は戦争など運命の支配下にある一切の地上的なものよりは高位な要素をも含んでいるのである。その意味で両者の関係は Antony と Octavia との地上的な結婚関係よりは高位なものである。Caesar は、*Women are not / In their best fortunes strong, but want will perjure / The ne'er-touched vestal* (Ⅲ. ii. 29~31) と女は幸運の間は弱々しいが、一旦困窮すると Vesta の神の神聖な女僧でも猛々しくなつ

て平気で誓を破つて墮落するものと云うが、それは女達の愛情が現世的な欲望に支配され、運命の奴隷である場合であつて、その愛が現世的な幸運以上の、純粋な愛のための愛である場合は、愛のために地上の一切を犠牲にして、その愛情は困窮のために益々強烈に燃焼し、現世に運命を否定し、愛の誓を益々固く守り、強化すると同時に純化されていくものである。Cleopatra は Caesar の予期とは反対の方向に困窮のため益々強くなつて行つたのである。

第十三場 Alexandria の Cleopatra の宮殿。この様な窮地に彼等を陥れたのは誰の責任なのか。それは唯々 Antony 独りの責任である。運命を好転し得る理性の教える明智に従わず、欲情 (will) のみに従つてしまつたからである。部下の忠告をきかず、不利な海戦を敢てし、而も女王が逃げたからといつて味方の艦隊を置き去りにしてその後を追つて逃げるとは単に大敗北であるばかりでなく大恥辱であると Enobarbus は云う (Ⅲ. xiii. 2~12)。Antony は遂に Caesar に一騎打を申込む (Ⅲ. xiii. 20~28)。運命の加勢があり、立派な軍勢の長たる政治家であり軍人である Caesar が怒と絶望に狂つた剣術使いの武人 Antony と危険な一騎打などに応ずる道理がないと Enobarbus は云う。I see men's judgements are / A parcel of their fortunes, and things outward / Draw the inward quality after them, / To suffer all alike, that he should dream, / knowing all measures, the full Caesar will / Answer his emptiness; Caesar thou hast subdued / His judgement too. (Ⅲ. xiii. 31~37) と Enobarbus は Antony を評する。一般人には現世の物質的な状態に非常に支配されて判断を下す。ところがその物質的状态は運命が支配して現に存するが如くあらしめているのである。其故に判断も運命の一部分と云うことになる。そこで外界の物質は人間の内的な性質を同化させていく。外的事情の悪化が Antony の性質まで墮して、彼の判断を狂わせてしまつた。Stoic な精神から云うならば、Antony は動物的なものに墮して最早救い難き人間となつてしまつたのである。即ち Antony は Caesar に判断まで征服されてしまつたのだと Enobarbus は考える。そこで彼は判断まで狂つた Antony を見捨てるべきであるか、それとも自らが馬鹿者となつて判断力まで失つた君主 Antony に対してどこまでも忠節を守り、史上に自らの名を留むべきか、と迷う (Ⅲ. xiii. 41~46)。其処で中世的な忠節と近代的な理性との葛藤を彼の心中に

見ることが出来る。彼は stoic に完全になり切ることが出来ないし、同時にまた loyalty と reason とを超越した永遠の人間愛 (eternal human love) にも到達出来ない。其故に彼には Antony の偉大性をこの場面では解することが出来ない。Caesar の使者 Thidias が Cleopatra に Wisdom and fortune combating together, / If that the former dare but what it can, / No chance may shake it. (Ⅲ. xiii. 79~81) と、運命が賢者を攻めても賢者が依然として賢者であるならば、運命は賢者を害ねることが出来ないと Stoicism の truism を説いて、Antony を斃して自己の安全を計るようにと勧める。しかし Cleopatra は妖婦 (vampire) でなく、やはり偉大な女王であるのでそれをしない。此の戯曲では Shakespeare は stoicism の敗北を認めているようである。Cleopatra は表面 Caesar に諂つてその使者 Thidias がその手に接吻することを許す。Antony はそれを見て、また Enobarbus から女王が Thidias に云つた言葉を聞き知つて、愛の世界から迷いから醒めた如く、権力、戦争、政治の争われる運命の完全に支配する現実の世界に降り立つて、大いに怒ると共に自らの過去を回顧し、かくの如く権力を失墜し悲惨な境遇に追い込まれたのはすべて娼婦 Cleopatra のためであると猛烈に女王をくたす (Ⅲ. xiii. 110~115)。同時にまた Antony は現在の悲境を、When my good stars, that were my former guides, / Have empty left their orbs, and shot their fires / Into the abysm of hell. (Ⅲ. xiii. 145~147) と云つて超自然的な外的運命即ち星によつて表わしている。Antony の不運は、女王の魅力によつて溺愛し、彼の個性的な特質よりの弱点によつて明智を働かすことが出来ず、彼の個性が形成していると表現されていると同時に超自然的な外的な力、即ち星の力によつても表現されている。内外の呼応として表現されている。やがて Antony は Cleopatra と仲直りをして明日の最後の奮戦を約し、はかない勝利の希望を持つ。この様子を見て、Enobarbus は、Now he'll outstare the lightning; to be furious / Is to be frightened out of fear, and in that mood / The dove will peck the estridge; and I see still, / A diminution in our captain's brain / Restores his heart; when valour preys on reason, / It eats the swords it fights with: I will seek / Some way to leave him (Ⅲ. xiii. 195~201) と云う。彼は Antony の許から立ち去る決意を遂にする。これは Antony が reason を失つてし

まつたことと、reason を重んずる友であり部下である Enobarbus が Antony を見捨てることとの内外の呼応を表わすものと思われる。

第四幕

第一場 Alexandria の前方 Caesar の陣営。Caesar は Antony の一騎打ちの挑戦を嘲笑する。Caesar の友 Maecenas は、Caesar must think, / When one so great begins to rage, he's hunted / Even to falling, Give him no breath, but now / Make foot of his distraction: never anger / Made good guard for itself. (Ⅳ. i. 6~10) と進言し、理性の勝つたローマ軍側は Antony の怒に狂つたのを利用して彼を斃すことを策す。

第二場 Alexandria の Cleopatra の宮殿。Antony には Caesar が一騎打ちの挑戦に応じない理由が解らない。ところがその理由は、Enobarbus には明瞭で、He thinks, being twenty times of better fortune, / He is twenty men to one. (Ⅳ. ii. 3~4) と Antony に説明する。戦の前夜の饗宴は悲しみの宴と化してしまう。

第三場 Alexandria の宮殿の前方。天地に妙なる音楽が聞える。警戒の兵士達が皆それを聞く (Ⅳ. iii. 10~21)。それは Antony を守護する angel の Hercules の霊 (Shakespeare は Antony の祖先が Bacchus の神と伝えられていたのを Hercules と変えている。(Ⅳ. vii. 43~44) が彼から立去るのである。いよいよ彼は運命から完全に見放なされてしまう。

第四場 Alexandria の宮殿の一室。Antony は、If fortune be not ours to-day, it is / Because we brave her. (Ⅳ. iv. 4~5) と云う。彼は運命に敵対していることを意識している。運命を好転させるのと反対の方向を自己の行動が取つて来たことを自ら知つている。Cleopatra は Antony の甲冑を着ける手伝をする。哀れさをそそる場面である。Antony はいさぎよく出陣する。女王は、that he and Caesar might / Determine this great war in single fight! (Ⅳ. iv. 36~37) と空しき願いを祈る。しかし運命に見捨てられた Antony にはそんなことは起り得ない。

第五場 Alexandria の Antony の陣営。Antony はその朝 Enobarbus が遂に彼の許を去つて Caesar の側に走つたことを兵士から聞く。彼はそれに対して怒らず、持前の非常な寛大性を發揮する。Go, Eros; send his treasure after, do it, / Detain not jot, I charge

thee: write to him—/I will subscribe—gentle adieus and greetings;/ Say, that I wish he never find more cause/To change a master. O, my fortunes have/Corrupted honest men. Despatch—Enobarbus. (IV. v. 12~17) と彼は感慨無量である。この言葉は Antony の人間性の偉大さを実によく表明している。彼の如き偉大な人物は理性では評価出来ない。彼は既に運命の支配する現実の世界の彼方に心が超越し、Enobarbus を怨まず怒らず、却つてそうした世界に叫吟する Enobarbus を憐れみ、彼の軍用箱や貴重品を別れの言葉を添えて部下に送り届けさせる。運命の支配する世界にのみ住み、理性のみを信ずる人間、現実を超越することの出来ない人間はたとえ正直な人間であっても屢々墮落することのあるのを Shakespeare は示唆しているようである。

第六場 Alexandria の Caesar の陣營。Caesar は、The time of universal peace is near:/ Prove this a prosperous day, the three-nook'd world/ Shall bear the olive freely. (IV. vi. 4~6) と Caesar の運命が最もよく開けて、国家統一がなり平和達成の目の目前にあるを確信し、勝利を期している。一方 Antony の許を去つて寝返りを打つた Enobarbus はうつうつとして自責の念に悩む。(IV. vi. 18~20)。人間は理性のみでは生きられるものではない。人間には理性以上の大切なものがあることを彼は悟るに至る。其処へ Antony が彼の軍用箱や貴重品に手紙や更に多くの賜物を添えてわざわざ送り届けてよこしたことを知り Antony の偉大な generosity に全く心が庄倒されてしまう。Caesar の部下の兵士すらその偉大な人間性にうたれて、Your emperor/ Continues still a Jove. (IV. vi. 28~29) と Antony を絶讃する。Enobarbus は其処で増々懊悩し、I am alone the villain of the earth, / And feel I am so most. O Antony/ Thou mine of bounty, how wouldst thou have paid/ My better service, when my turpitude/ Thou dost so crown with gold! This blows my heart:/ If swift thought break it not, a swifter mean / Shall outstrike thought, but thought will do't, I feel, / I fight against thee? No, I will go seek/ Some ditch, wherein to die: the foul'st best fits/ My later part of life. (IV. vi. 30~90) と叫ぶ。Antony の広大無辺な魂の光に照らされて Enobarbus の信条は光を消して自滅していくのを彼は知つたのである。

第七場および第八場 両陣營間の戦場および Alexandria の城壁の下。戦況と消えゆく燈火の消滅寸前の閃の如き Antony の人生最後のはかない勝利と凱旋状況。

第九場 Caesar の陣營。Enobarbus の悶死の場面である。彼の最後の言葉は、O sovereign mistress of true melancholy, / The poisonous damp of night disponge upon me, / That life, a very rebel to my will, / May hang no longer on me. Throw my heart / Against the flint and hardness of my fault, / Which being dried with grief, will break to powder, / And finish all foul thoughts. O Antony, / Nobler than my revolt is infamous, / Forgive me in thine own particular, / But let the world rank me in register / A master-leaver, and a fugitive: / O Antony! O Antony! [*Dies*. (IV. ix. 12~23)] である。彼の一生は意欲に逆らつた理性の生涯であつた。Antony の一生は理性に逆らつた意欲の生活であつた。結局運命の支配する世界に冷静な理性のみを信奉して生きた彼はたとえ運命を好転させ得ても最後は悲惨である。理性のみでは解決し得ない人生の羽目に(特に心的な)たち至つた人間が、唯一の頼り所と信じた理性に幻滅を感じた場合は絶対的な窮地に追込まれて悶死するの外の無い。寧ろ馬鹿者に見えた Antony の方こそ死は再生の契機となつて満足して自らの悲劇を受け容れている。Enobarbusこそこの戯曲中の唯一の眞の悲劇的な人物となつている。彼は自らの生涯も死も全部否定して絶対的な死に入り、自らの死を満足して受け容れることが出来ないのである。観客は彼の死をやすつばい倫理的な観点からすれば、苦境に陥つた君主に寝返をうつて敵側に走つただけだから、当然の応報として受け容れるのであろう。しかし人間問題として深く考えるならば彼に同情的にもなり、そう簡単にかたづけられるわけにはいなくなる。彼はその悲劇的な死を自他共に受け容れることの出来ないこの戯曲の唯一の人物である。

第十場~第十二場 両陣營の間。第十場および第十一場は Antony の最後の勝利の翌日の戦況の一部を表わす極めて短い場面である。第十二場では Cleopatra の艦船に燕が巣を掛けたことが伝えられる(IV. xii. 3~9)。これはいよいよ Antony の没落を示す前兆である。果してエジプト艦隊は全く戦わずして全部ローマの艦隊に降伏してしまう(IV. xii. 11~13)。その有様を見て Antony は、O sun, thy uprise shall I see no

more, / Fortune and Antony part here, even here/
Do we shake hands. (IV. xii. 18~20) と絶叫する。彼はこの様な艦隊の寝返は Cleopatra が彼を裏切つて、Caesar と結んだためであると誤解する (IV. xii. 20~29)。そして信じていた愛を失つたと考え狂気の如くなる。其処へ Cleopatra が登場するので彼は殺意を示す。女王は恐れて直ちに逃れる。

第十三場 Alexandria の Cleopatra の宮殿。逃げ帰つた女王は Charmian に事情を話す。Charmian は女王が霊廟の中に隠れる様にと勧め。そして高位にある人がその位や権力を失う時は死ぬことよりも深い苦しみを感ずるのだから (IV. xiii. 5~6) Antony が狂つた如くなるのは当然だと云う。Cleopatra は Antony の怒りを避けるために、宦官の Mardian を使つて、女王が自殺を遂げたと偽つて Antony に伝えさせる。

第十四場 Cleopatra の宮殿の別室。Antony は例の有名な人生観照を下僕の Eros に語る。運命の支配下にある現世では人間は絶えず変る浮雲の様なはかないものであると云う (IV. xiv. 1~14)。地上の一切を(恋も権勢も名誉も含めて) 失つた切々たる観照である。彼は悲しみのうちに一種の悟の境地に入っている。其処へ Mardian が登場して、Cleopatra が Antony の名を呼びながら自殺したと偽の報告をする。Antony には Cleopatra に対する愛が甦つて、Unarm, Eros, the long day's task is done. (IV. xiv. 35) と彼はもう現世には用がなく終りだと云い、女王の後を追つて自殺の決意をする。Eros!—I come, my queen:—Eros!—Stay for me, / Where souls do couch on flowers, we'll hand in hand, / And with our sprightly port make the ghosts gaze: / Dido, and her Æneas, shall want troops, / And all the haunt be ours. (IV. xiv. 50~54) と浄土 (the Elysian field) で、Dido と Æneas に代つて彼等二人が王者になろうと云う。女王は、she which by her death our Caesar tells / "I am conqueror of myself". (IV. xiv. 61~62) であると云う。死こそは現世に打ち勝つことであり、自らの運命に打ち克つことであると彼は考える。其故に Eros が Antony の自殺の介錯をすることは、Thou strik'st not me, 'tis Caesar thou defeat'st. (IV. xiv. 68) である。運命に打ち克つことは好運に満ちた運命の寵児たる Caesar を打ち破ることである。彼を打ち斃そうとしている Caesar に彼を斃すことを不可能にするので結局 Caesar に打ち勝つことであると考える。この悲劇的な死を遂げること

は彼にとつては、But I will be / A bridegroom in my death, and run into't / As to a lover's bed. (IV. xiv. 99~101) である。Eros が彼を殺さず、彼を殺すべき剣で自らを刺して先に自殺してしまう。彼は Eros の自殺の方法に倣つて自殺を試みるが仕損じてしまう。恰度其処へ女王の死の虚報を聞いて Antony がもしものことをやりほしないかと心配して女王が遣わした Diomed が登場して、女王は生きて居り、霊廟に避難していると伝える。Antony は駆けつけた護衛の兵士達に彼を女王のいる霊廟へ運ぶようにと命じ、Nay, good my fellows, do not please sharp fate / To grace it with your sorrows: bid that welcome / Which comes to punish us, and we punish it / Seeming to bear it lightly. (IV. xiv. 135~138) と彼等にいう。この Antony の言葉は実は観衆に向つて云つている様に聞える。其故に観客の気持は彼の死を悲壯とは感ずるであろうが重苦しい悲惨さからは免かれる。

第十五場 霊廟。Antony の血に染つた有様を見て、霊廟の窓から彼を引き上げようと大騒ぎをしている Cleopatra を見て、Antony は、Peace! / Not Caesar's valour hath o'erthrown Antony, / But Antony's hath triumph'd on itself. (IV. xv. 13~15) と云う。これに答えて Cleopatra は、So it should be, that none but Antony / Should conquer Antony, but woe 'tis so! (IV. xv. 16~17) と云う。Antony は運命にも Caesar にも打ち負かされたのではない。自らに自らが打ち勝つたのであり、絶対に運命や Caesar に征服されたのではない。しかし Cleopatra は Antony をこの様な状態にまで追いつめた運命に対して、No, let me speak, and let me rail so high, / That the false huswife Fortune break her wheel, / Provok'd by my offence. (IV. xv. 43~45) と運命を罵る。Antony の最後の言葉は、The miserable change now at my end / Lament nor sorrow at: but please your thoughts / In feeding them with those my former fortunes / Wherein I liv'd: the greatest prince o' the world, / The noblest; and do now not basely die, / Not cowardly put off my helmet to / My countryman: a Roman, by a Roman / Valiantly vanquish'd, Now my spirit is going, / I can no more. (IV. xv. 51~59) であり、彼は運命の支配から脱却した瞬間に今迄で罵り蔑んでいた運命とも和解した気持を示し、ローマの世界とエジプトの世界との間に彷徨

していたのであつたが、これら両世界を死によつて止揚している。彼の死は両世界の否定ではあるが、同時にまた永遠の肯定の世界でもあつたのである。AntonyはElysiumの夢をCleopatraの両腕に抱かれての接吻に実現させ、愛する女王の行末を慮り、己の名誉ある最も高貴なる過去を偲びつつ、現在の悲劇に満足して死んで行く。これを観る観客もやはりAntonyの気持に同化され、同感してその死を受け容れることには疑がない。Antonyの死後にはCleopatraは非常に虚脱的な空虚な気持に襲われる。運命の支配する世界でAntonyは自ら運命を見捨て、また運命からも見捨てられ、最後に運命の支配から脱すると同時にそれと和解して、来世へと旅立つたのであるが、女王にとつては全部を捧げ尽して愛したAntonyが居なくなつた運命の支配するこの世界は最早や不用のものである。女王の地位も王権も世の一切は意味のないものになる。重大なものはAntonyの行つた来世のみとなる。其処で女王はやがてこの運命の支配する世界からの脱出と超越とを覚悟し、精神の純化が心の申に起り、勇気を取戻すと同時に一層湧き出で、決然たる態度になる。(IV. xv. 73~91)。

第五幕

第一場 AlexandriaのCaesarの陣營。CaesarはAntonyの死を聞いて、The breaking of so great a thing should make / A greater crack. The round world / Should have shook lions into civil streets, / And citizens to their dens. The death of Antony / Is not a single doom, in the name lay / A moiety of the world. (V. i. 14~19)と云う。王者の死ぬ時はこれに呼応して天変地異が起ると考えられていた。この言葉はCaesarの気持をも表明している。政敵ではあるがAntonyの死を人間としてCaesarはやはり悲しむ。Look you sad, friends? / The gods rebuke me, but it is a tidings / To wash the eyes of kings. (V. i. 26~28)と云う。そして部下達とAntonyを偲び、その人物を讃える。MaecenasはAntonyを評して、His taints and honours / Wag'd equal with him. (V. i. 30~31)と云い、Agrrippaは、A rarer spirit never / Did steer humanity: but you Gods will give us / Some faults to make us men. (V. i. 31~33)と云い、Caesarは、O Antony, / I have follow'd thee to this, but we do launch / Diseases in our bodies. I must perforce / Have shown to thee a declining day, / Or

look on thine: we could not stall together, / In the whole world. But yet let me lament / With tears as sovereign as the blood of hearts, / That thou my brother, my competitor, / In top of all design; my mate in empire, / Friend and companion in the front of war, / The arm of mine own body, and the heart / Where mine his thoughts did kindle; —that our stars, / Unreconcilable, Should divide our equalness to this. (V. i. 35~48)と悲しむ。この様な偉大な人物を自殺せしめるに至つたのは自らとは不倶戴天の政敵であり、それは星即ち運命の然らしめる所であると歎く。彼等の言葉は観客がAntonyの死を受け容れると同時に彼の偉大性を認め、彼の死を惜しむようにとShakespeareが観客に意図した所である様に解される。単にAntonyがCleopatraに溺愛して妻を捨て国家を忘れた不埒な人間であるので彼が自殺せざるを得なくなつたのは当然であると云う浅薄な道徳観念によつて彼の死を観客が受け容れるならば、その観客は正しくこの劇を見ていないことを示すのである。それ故に観客がAntonyの死ぬ場面まで観劇して来てその悲壮感にうたれ、彼等の言葉に表わされている様な気持になり得なかつたならばその劇の演出が間違つているか、或は観方が間違つているかであることを気付かねばならない。

第二場 Alexandriaの靈廟の一室。運命の支配下にある現世に望を捨て、死に憧れるCleopatraの心境を、My desolation does begin to make / A better life: 'tis paltry to be Caesar: / Not being Fortune, he's but Fortune's knave, / A minister of her will: and it is great / To do that thing that ends all other deeds, / Which shackles accidents, and bolts up change; / Which sleeps, and never palates more the dung, / The beggar's nurse, and Caesar's. (V. ii. 1~8)と女王は表わしている。この言葉は運命の桎梏下に呻吟することの屢々であつた当時の観客に非常な解放感を与えたことであろう。Cleopatraの心は既に運命から脱却していても、なおこの様に運命を深刻に絶えず意識している。女王が財宝を多く隠していると女王の面前でCaesarに暴露したSeleucusにすら、女王は、Prithee go hence, / Or I shall show the cinders of my spirits / Through the ashes of my chance. (V. ii. 171~173)と運命を表わす言葉chanceを用いている。女王にとつては運命の支配下のこの世か

ら逃れて、Antony の行っている世界へ旅立つことは、
 Show me, my women, like a queen; go fetch / My
 best attires. I am again for Cydnus, / To meet
 Mark Antony. (V. ii. 226~228) であり、始めて Antony
 と逢つた Cydnus 川へ行くことであり、Cydnus こそ
 は彼女の Elysium であり、また其処の女王となること
 であつた。その世界は運命の支配するこの世の如く変化
 する世界ではない。その世界に行こうと決意をすれば、
 その世界の光に照されて今や不変不動の心境になる。
 Now from head to foot / I am marble-constant :
 now the fleeting moon / No planet is of mine.
 (V. ii. 238~240) と女王は云い、不滅不死の憧憬を心中に
 懐く様になる (V. ii. 279~280)。その世界から Antony
 が呼んでいるように女王には思われる。Methinks I
 hear / Antony call. I see him rouse himself / To
 praise my noble act. I hear him mock / The luck
 of Caesar, which the gods give men / To excuse
 their after wrath. Husband I come : / Now to that
 name, my courage prove my title! / I am fire,
 and air; my other elements / I give to baser life.
 (V. ii. 288~289)。その不滅不変の永遠の楽土に心を移
 して見ると、運命の支配下にあつて絶えず好運不運の変
 転に憂き身をやつしている人間はたとえ帝王と雖も馬鹿
 者の様に見える。O, couldst thou speak, / That I
 might hear thee call great Caesar ass, / Unpoliced.
 (V. ii. 305~307) と身を咬む毒蛇に女王は云う。大なる
 勇気を振り興してその世界へ旅立つてこそ、偉大なる
 運命の支配を受けぬ帝王である Antony に恥しからざる
 正当な女王となる資格を得るのである。女王は人間を
 形成する四元素、土水空火のうち下等下位の元素である
 土と水とを捨て、貴き元素火と空気のみになつてその
 世界へと上昇するのである。運命の支配する現世に何
 等心を残すことなく、唯々 *Cleo*. What should I stay
 —*Char*. In this vile world? (V. ii. 312~313) という
 最後の言葉を残して、エジプト人でありながら、
 after the high Roman fashion (IV. xv. 87) 即ちローマ人的
 なやり方によつて悲壯ではあるが美しい自殺を遂げたの
 である。それ故に観客は女王の死を受け容れるのみでな
 く、その死を讃美するであろうことには疑がない。

IV. 以上各幕各場の順をおつて運命との関連の深い言
 葉を列挙して、登上人物と彼等の運命とがどの様に取扱
 われているか、また彼等の悲劇を運命観から観客(読者
 を含む)がどの様に受け容れるだろうかという説明を試

みたのである。Shakespeare はこの戯曲では外的な超自
 然的な力としての運命と、登場人物の些細な一欠点が起
 因となつてその性格がそれぞれの運命を形成していく内
 的な運命とを互に相呼応 (correspond) させている。それ
 故にエリザベス朝の人々の運命に対する先に述べた第一
 の態度と第二の態度とを巧みに融合統一させているとも
 見做すことが出来よう。外的な運命と内的な運命とが相
 一致するように表現されているので、現代人の眼から見
 ても登上人物が運命に支配されて不運に陥つて行く姿を
 見ても別に不自然さや不合理さを感じない。この戯曲に
 表わされた現実の世界は運命に支配されて絶えず変動し
 て行く。政治、戦争、政策結婚、其他一切の事象はすべて
 運命の支配を受けて変化変転していく。不変なものは何
 一つとしてない。しかしながら、Shakespeare の作品に
 は、現代文学に現われる様な経済的関係や社会的関係の
 要素が個人に対する圧力となり、人生の悲劇を形成する
 運命となつて作用するといつたものは未だ表現されるに
 は至つて居らないことは勿論であるが、この様に回転す
 る輪の様に変転することがこの戯曲の特徴の一つをなし
 ている。Antony もローマ的世界とエジプト的世界を絶
 えずつ徬徨する。すべてそうした動揺変転のうちにあつて
 唯一つ不変な云わば輪の中心をなしているものがある。
 それは Antony と Cleopatra との愛である。この愛は
 肉体的な性愛から天使の域に達する間の非常に幅の広い
 愛である。時にはこの愛も運命の支配の影響を受けて、
 雲が日光を遮つて地上の事物が時には明るくまた時には
 暗く映し出されることのある様に、時には憎しみに変貌
 したりする場合もあるが、その愛の相の変化に拘わらず、
 その根底に横たわる本質には変化がなく、始めから最後
 まで変わらずに存続している。この中心となつている不変
 の愛が運命の支配する苦難に満ちた現実の世界を貫き通
 して、Dionysus 的な、自由な愛情を中心としたエジプ
 ト的世界と Apollo 的な規律を尊び、権力を中心とした
 ローマ的世界とを謂わば止揚して、運命の支配の外にあ
 る世界即ち Elysium へと上昇し、貫き通している。こ
 の止揚は死であつて、それによつて開かれるこの Ely
 sian field は永遠不滅の世界であり、安住の世界である。
 これは死の世界であるが同時に再生の世界でもある。卑
 近な言葉で表わせば、真の自由の世界であり、また詩の
 作り出す世界である。冷然たる理性だけでは、たとえ運
 命を自己に有利に利用することが出来るとしても、決して
 この世界に入ることは出来ない。それは Enobarbus
 によつて立証されている。この世界に入るには男女の性

的恋愛に始まつて、それが純化され高揚され、天使の如き人間全体に、宇宙全体に及ぶ様な廣大無辺な熱烈な Antony と Cleopatra の様な愛がなければならぬ。彼等がこの様な愛によつて運命の支配下にある現実の世界を苦しみつつ歩み、遂にこの世界に到達するまでの苦悩の旅路をこの劇は表わしていると考えられる。彼等は運命の支配する現実の世界にあつても心は既に時々この世界からの光明に照されて現実の世界から解脱することが出来た。即ち心は運命の支配から時々脱出することが出来たのだ。そして其処から現実の世界を眺めることが出来たのである。彼等は運命の支配下に苦吟しながら運命を眺めると同時に、その支配を脱した所に立つて運命を眺めることも出来たのである。従つて彼等の言葉には運命に関するものが非常に多いのはこの様な理由によるものであると思われる。運命の支配下に全く没入して精神の自由を失つてしまうならばかえつて運命の力を感じることが出来ず、運命に批判的な眼を向けることも出来なくなるからである。

Shakespeare の悲劇時代の作品では例えば、Hamlet は死を felicity (至福) (*Hamlet*. V.ii.357) と云い、*King Lear* では Kent によれば王の死は the rack of this tough world (*Lear*. V.iii.314) から自由にする事である。しかし死は唯々現実の世界の苦悩から解放す

る意味で felicity であつて何等それ以上のものではない。死は総ての終りであつて永遠の眠りに過ぎない。ところがこの劇では死は現世の苛酷な運命の支配から解脱して永遠不変な自由な至福な世界への門出となつて居り、しかもその世界が相当に強調されている。それであるから或る意味では現代よりは苛酷な運命に自らも支配され、また他人が支配されているのを屢々目前に眺めていた当時の観客は、運命からの解放を切望することが現代人よりは甚だしかつたであろうから、この悲劇における死を自らの憧憬している気持を満してくれるものとして喜んで受け容れたことだろう。この様にこの悲劇を観客もまた受容することがこの悲劇の一大特徴であると云うことが出来る。

以上述べて来た様な悲劇受容の度が次第に高まつて行くならば、それに伴つて悲劇性は次第に稀薄になつていくことは明白である。その度を高める最も有効なやり方は Elysian field を死より生へと還元せしめて、この地上に実現せしめることである。これが即ち Shakespeare の後期の作品であるロマンス劇であると云い得ると思う。其故にこの劇は Shakespeare が悲劇からロマンス劇へと発展する過渡期的な作品であつて、しかも偉大な悲劇作品であると見るのが正しい見方の方である。